

あゝ長閑けき春の景色よ。

薄緑の若葉が花の散り果てた梢を飾ると杜鵑が一聲二聲高く叫ぶ。世は初夏となつたのだ。漸く緑の色は深くなり陽に接したところが白緑に輝いて全く夏に入つた事を眼から一番さきに意識させる様で暑さは酷くなる。濃厚で粘り強い眞晝の海水は、遠くの方から脹んで白熱の太陽光に煮立つやうに光りながら岸に寄せ、岸の磯波だけが白い。焼けつく砂を素足で飛び越え、飛び越え、ざんぶと海に抜手を切る子供の姿も亦夏景色の一つである。

やがて空は深淵のやうな碧さにその無窮さを思はせ晝は白金のやうな氣流を感じ、夜に入れば星の數の頓に増したことによろかされ、何處どもなく蟲の音が聞ゆはじめる。秋の七草が野を色取り、月の影が美しく照る。稻が黃金色の穗を重さうに押合つて垂れ、稻穂をついばむ雀の鳴子の音に驚かされて、バツと飛び立つのも、秋でなくては眺め得られぬ景色である。四方の山々が紅葉の錦を織ると、吹く風は漸く寒く、夜に入つて止んだ後も、裏庭で乾き切つた土の上に落葉する音がはつきりと聽取られる。かくして冬は目前にせま

つて來てゐるのだ。
紅葉はすつかり散り果てた、そして家の影なりに、黒い地面に霜柱が午過ぎても消らず、陽のあたるところだけじわ／＼に下黙がうまい、荷車の轍の跡が醜く土を堀つてゐるのを見る。その様な時も過ぎて、一面銀世界、雀が軒端で轉り、犬が走りまはるのを見るのであるあゝ。雪ほど美しいものが他にあるであらうか自然是我々に春・夏・秋・冬、皆折々の景色をそへてあかぬ景色を見せて呉れるのだ。

夏の興（螢狩）

三甲名烟榮一

小川の水のさらさらと音をたて螢火飛び散るの一夕予二人の友を誘ひ暗を冒して郊外に遊びぬ。時しもかしこ處に螢火飛び交ふ影鮮かに、高きは柳の枝をかすめ、低きは水に點じ、或は散じ或は集り、前に消えつ後に燃ゆつ、千變萬化の景、面白くあざやかなり。空より降るものゝ如く、地より湧くものゝ如し。我等を迎へて或は高く、或は低く。

に見る惡魔は、未だ比較的制し易いが心の惡魔は誠に始末にをへぬ。よほど、しつかりしてからねばならぬと。

すべて人生の行路には様様の誘惑がある。幾多の障碍がある。それが一變して心の惡魔となる。だから、その誘惑に打克つ克已心その障礙を打破つて進む勇猛心。即ち意志の力がなくては到底世渡りは出來ない。苦しい事や、悲しい事に出来へば一層元氣を、ふり起して、努力し、心の惡魔に乗せられぬ様に、せねばならぬ。

古人の句にも、

　　螢蚊をも殺さで殺せ我が心。

　　あるが實に、よく言つたものだ。

怖しき思ひ出

三甲中正男

なると顔と言はず、手足と言はず、ぶく／＼に、はれ上つてゐることがある。自分は考へた。蚊は小さいがなか／＼油斷が出來ぬ、自分等には惡魔だ。惡魔は少しでも近づけぬ様に、せねばならぬ。しかし、この目

盛りにズラリとやつて來たのです。

「オイN毎日何うして居る」

と色の黒い顔に眼ばかり白く光らせて聞くのです。

「ウン本ばかり讀んだる」

「駄目だな男がそんなこつちやア」

と云つてそれから日本男子は海が好きでなくてはとて

も駄目だとか海國男子になれとか長々御談義を聞かせた後。

「どうだい、これから海へ行かうじやないか」

と云ふのです。その頃私しはまだ少しも水泳が出来ませんでした。そして海と云ふと河童とか海坊主とか居ると云つて怖しきかされて居たのでとても海へ行く氣になれませんでした。で「止めだ」と云ひましたスルトKは「何故だハ、ア怖しいのかい、それでも男かね」と彌次ります。私しは生れつき我儘な意地ツ張りで自尊心の強い子でした。だからムラムラと反抗心を燃しました。けれども矢張り海へは行く氣になれませんでした。「止めだ。泳げないんだだから」と残念ながら到頭白狀してしまひました。Kは愈々嘲笑ひながら「そうだろうよ、いゝやそんならボートに乗りに行

かうや、面白くて一寸も怖くないんだせ」とすゝめます。

ボート、あれなら怖くないだらう。そしてさぞ愉快たらうと思ひました。私しはよく橋の上から川の面を快く行くボートを度々美望の眼で見てゐましたから。

「行かうボートなら」

と云つて、母にも告げずKと家を出ました。

青い廣いそして豊かに海水をたゝへた瀬戸内海はゆるやかに小波を立てゝさゝやいて居ます。こゝへKと私とを乗せたボートはこぎ出されました。力強くKが漕ぐとボートは水を切つてスーツスーツと進みます。

私は其の時生れて始めて勇壯な快い氣に充されましか。カラリと晴れ切つた青空と遙の彼方の天と接觸して居る無限の大海上。それは私しの心をスガスガしくさせるのでです。だがその中にも或る不安がたゞ潜んで居ました。

「Kどこ迄漕ぐのだい」

とKが餘りズンズンこぐので少々不安になつた私しはさゝましたがKは。

「ウンモット行くのさ」

次に大雷鳴が來ました。そして私がアツと仰天したのは海上へ火柱の様な物が立つたからです。その怖しさ私は膽をつぶして眼を固くぢてしまひました。併しボートはKが一生一代の努力で岸へ着けてくれたのでズブぬれの二人はヤツト助かりました。私には此の少年期の怖しい出來事が深く深く印象されて仕舞ひました。

一人の學生

三甲 中 正 男

試験の終つた後の日であつた。五年生のKとNは城山へ登つた。空は晴れて太陽が輝いてゐた。微風が時々快く吹いて来る。頂上に登つた二人は胸が急にスガスガしくなるのを覺いた。

彦根の町々からズーツと彼方の連山を見渡した。ウネウネと連山は気持ちの好い曲線を青空にクツキリと浮んだ様に表して居る。

「オイN何時來ても好い景色だね」「ウン好いな」

と言葉少くNは答へた。彼は斯んな事を考へて居た。この小さな彦根の町も外見的には平和に見ゆる、だが人間の棲む所だ。見苦しい人間性の争ひや無耻や醜怪があるだらう。何故人間は眞の平和が得難いのだらうか。こんな事を彼は考へて居たのだつた。

「オイKいよ／＼卒業も間近になつたが卒業したらどうする」

とNはKに向つて尋ねた。

「ウムまだモット勉強するよ。商業學校へ行つてね」

「そうか大學へも行くだらう」

「あゝ行くよ」

「大學を出てからどうするね」

「大學を出てからどうするね」

輝かせて居た。Nは云つた。

「大學を出てからどうするね」

「どうするつて君いよ／＼實社會へ出て働くよ。大いにやるね。うまく望み通り工科大學が出られたなら會社を建てゝ見るつもりだ」

Kは彦根でも有數の財産家である家の長男である。Nは此の時に。

「そして労働者を雇うだらう」

Kは前途の成功を夢見る様に彼方の空を見つめて眼を

輝かせて居た。Nは云つた。

「あゝ行くよ」

「大學を出てからどうするね」

「どうするつて君いよ／＼實社會へ出て働くよ。大いにやるね。うまく望み通り工科大學が出られたなら會

社を建てゝ見るつもりだ」

Kは彦根でも有數の財産家である家の長男である。Nは此の時に。

「そして労働者を雇うだらう」

「あゝ行くよ」

「大學を出てからどうするね」

「どうするつて君いよ／＼實社會へ出て働くよ。大いにやるね。うまく望み通り工科大學が出られたなら會

社を建てゝ見るつもりだ」

「何だツ。君は僕の成功を呪ふのか」

「呪ふのではない忠告するのだツ」

Nは言葉も荒々しく怒鳴つた。そして云つた。

「君はブルジョワ的な頑迷な貪慾な男だ」

Nは云つた折りKが叫んだ。

「君は社會主義者だ。社會主義にかぶれたのだ」

「社會主義。成程。僕の云つて居るのは正義を尊重し

て云つて居るのだ」

Nの眞面目な忠告もKを徒に怒らせる許りであつた。

「オイ何どでも云へ。モウ絶交だツ」

と怒つたKは足音荒々其處を降りて行つた。ジーツと燃へる様な眼でNはKを見送つて居たが。

「奴。何ど云ふブルジョワ的な男だらう。あれでもクリスチヤンかな」

と呴いて彼も城山を降り始めた。

晚秋の夜の蜘蛛

三甲 楠 好 雌

幾度も霜を受けた様な色のあせた葉をたらりと垂れ

「そりや勿論さ労働者が居らないと工場は事業が出来ないよ。マアそれから努力して財産家に成つて世間で云ふ成功者になるつもりだ」

「ホウ財産家にか」

「そうだ。何の彼のと云ふが金は矢張り世の中で一番の有力者だよ。ダカラ僕も精一杯金を貯めるつもりだよ。後の安樂の爲にね」

「ファンそとか一體どの位金が有つたら君は満足なのだらう」

「そこ迄もKは拜金主義な男であつた。Nは苦しい顔をして。」

「限りがない、そりや君ひざひぜ」

「何故だ」

「余りに君の心は汚れて居る。よく聞き給へ。金持になるのもよいが金持ちにならうとして努力する者は一體に無耻で無情だ」

「人間はそれでは困るよ。正義と同情を真ツ先きに立てゝ進むのが本當だ。そうだらう。工場には労働者が

勞働する。君は資本家だ。働かなくてもよい。労働者の神聖な努力を以て得た金は工場主の君に大部分這入る。そして力の労働者は僅な金を貰ふのだらう」

「勿論」

「君は金がドンドン増すのを悦んで居る。労働者は年中僅かな賃金で働く。そして資本家と財産上の懸隔は餘りに甚しい相違だ。今の資本家は皆此の様な不當な事をやつて居るのだ。公平に金を與へて懸隔がひゞくないやうにすべきだ」

Nは眞剣であつた。蒼くなつた顔に眼ばかり凄く光つて居た。

「そんな事では財産家になれぬ」

「何ツ何だつてK。君の心には惡魔が居るのだね。君の心は汚い限りのない慾で充ちて居る。人間の弱さだ君の家は今でさへ財産家ではないか。それにまだそんなに慾があるのか。不正な貪慾を持つて居るのか」と正義を愛するNは激して云つた。

「君はクリスチヤンではないか。よく考へ給へ財産家の出来る一方には貧民の出来る事をね」

我儘者のKはこれ等の忠告に反抗心を燃して。

て半ば散つた薔薇の花が、艶もない薄きたない一輪ざしに投げ込まれて棚の隅の方で埃を浴びてゐる。五燭のにぶい電燈の光で黒く影を落して、その側には、ひからびた柿の皮が同じ様に埃を浴びてゐる。もう夜も更けたのか邊りは寂として物音一つしない。時々雨戸に触れる落葉の音が、かすかにするばかり。

ふと花が搖らいだ様に思つた。たしかに花は動いてゐるのだつた。黒い影が静かに搖れてゐる、と、落ち残つた花びらの一枚に面白い形のものが附いてゐて、むづくと動いてゐる。丁度、薄黒い小石の様な、それは、細い足を幾つも動かしてゐる。蜘蛛だ、よく見ると、棚の取り附けられた柱の破れ目から絹糸の様な糸が一枚の花びらに掛つて居る。腰の細い蜘蛛は、黄と、黒との斑色の節の多い足をむづくさせて、真中の香のよい所へ來て動かない。いつの間に來たんだらう。

毎日毎夜の様に落葉は庭を音づれて、秋はもう行かうしてゐるのに、なぜお前は冬ごもりもしないでゐるのか。醜いお前よ、私はお前が嫌いだ。然し私は今お

前に不思議に感ひを感じる。もう秋も行かうとしてゐ

るのに、早く冬ごもりをしないか。

蜘蛛は動かないで香のよい所に死んだ様にしてゐるもう此の山には雪が來た。間もなく此の里へも音づれて來て野も山も銀世界にしてしまふ時が来るだらうお前はそれを知らないのか。そのまゝではあまりにお前の行く先は、みぢめた。なぜお前は冬ごもりの用意もしないのだ。

蜘蛛はむづくと這ひ出した、そして腐つた様な花びらの一枚に脚をかけた時、花びらは、はらくと散つた。

暖い陽

三甲 北川壽

街道から少し側によつた丘には、若い芽を吹いた小さな名も知れぬ草が一面に生えて居て、暖い陽の光を吸ふて溶け入りさうに光つて居た。私は疲れ切つた足を引摺つて漸く其の丘までやつて來た。そして、ざつかりと其處の若草の上に腰を下した。

丘から細い道を隔てて左側には牧場があつて、牛が

裏つて來るのが常であつた。

陽が丁度私の真後に來た頃、牧場の小屋の煙突から淡い煙が静かに流れ出た。

私は、むづくりと立上がり、前の細道へと歩み出した。牧場の柵の根のところで草の芽を食つて居た牛は、いつしか其處の大地にぐつたりと寝そべつて居た

ゆく秋

三甲 北川壽

悲しき色に秋は暮れぬ。梢の枯葉悉く捲き盡し、黃金の扇かざしたる公孫樹も緋衣眩ゆく着流したる楓も櫨も皆寂しう裸木となり果てぬ。黄金の葉は荒涼の野末に朽ち、水涸れたる川底に鶴鳴の聲寒し。谷川の儘き姿、今は朽葉に埋もれて見る影も無きに、只松の枯木に真紅燃ゆる薦紅葉のまつはれるが物思ふ人の心を惹くのみ。あゝ、されど落葉に埋れる枯草の中、葉は萎れつるも小さな花淋しく咲ける野菊の様のいとほしさ哉。

風は限り無き悲哀を奏し、夕陽は己に影を收めたり

遠くには薄藍色の山々が東から西へ連つて居て、コバルト色の烟つた空には白い大きな雲が浮んで居た。暖い太陽を背にして居た私は、いつしか薄い汗の跡程春は深かつた。

街道では荷車の音が絶ゆずゆつたりと聞えて居た。時には自動車の響や道傍を通つて居る汽車の音も混つて聞えた。そして、それ等の響のあとは必ず土埃が

嗚呼かくて秋は行く。

日曜の一日

三乙大谷伍平

ゾーン……ゾーン。

六時を報するお山の鐘の音に夢は破られた。室の中はまだ暗い、惜しいところだつたと又もぐり込んで見たが、もら眠られない。少々位朝寝してもよい日曜の朝に限つて眠られないとは馬鹿らしい事だ。あたりを見廻すと朝の光が、障子の隙間から入つて、疊から柱を真すぐに攀ぢ上つてゐる。觀念して飛び起きた。下に降りて揚枝を使つてみると、女中が來て笑ひながら「おや今朝はお早いこと、道理で疊つて居ると思ひました。」といふ。馬鹿言ふなと叱りつけて腹癒せにする。

朝飯を終つて新聞を見てると例の牛乳屋さんが来て「お早う」と挨拶して牛乳を置いて行つた。實に職業に忠實な牛乳屋さんだ。毎朝五分と時間を違へた事がない。あの様に規律正しく一心にやつたら何事でも

成功するだらう。しばらくすると豆腐屋や大根賣りの呼び聲がした。つゞいてお隣の加三ちやんの泣聲が聞える。又お菓子をねだつてゐるのだらう。

柱時計は拾時を打つた。暖い日光の差しこんでゐる書齋に入つて幾何の難問を出して見た。

「エト二等邊三角形の 三角形の底邊上の任意の一點より……か」何んだ易い。次の問題はと見ると分らない。何度も首を振つて見ても解らない。止しちまへ。今度は英語のリーダを読み始めた。兎に角読み續けてみると、お山の鐘は拾二時を告げた。

書食後は野原を散歩した。青かつた田の疊も黄色になつて、秋の陽の光が暖かく輝いて居る。何だかすみれやたんばばの花の咲く春とは打つて變つて物淋しい紅葉した木の梢には鳥がゐて私を見下してゐる。ワツ！と聲たてて追ふとバタ～と羽音高く飛んで行った。黃色な葉がひらくと二三枚落ちた。

散歩から歸つた時は午後二時。机に向つて小學時代の恩師に手紙を書いた。あの先生を思ひ浮べる毎に先生は今頃何をしていらつしやるだらう、御別れした時には御親切な御注意を受けたが叱られる事もよく叱

られた。叱られ仲間にはH君も居た、K君もゐた。それから、あの人々は……等と色々なことが思ひ出され、て楽しいやな淋しい様な何とも云へない一種の感じがする。

お隣から「ど～こ、どんやれ、小田原名主の中娘、い～ろ白で……」と越を打つ音に合せて可愛い聲で唱つてゐる升ちゃんの聞てる。

夕食後雜談して居るといつもの辻占ひが拍子木を打つて面白をかしく唱つておもてを通る。静かな淋しい夜の町に次第に遠のくその聲は澄渡つた。玉の鏡の上はかる様な心地がした。

明日の學課の豫習も終へ、日誌を書いてゐると時計は拾時を報じた。高い空には輝く月が半ば落葉した水を寫して障子に青白く光つてゐる。

眞の尊さ

三年三浦尚孝

全力を盡した後の樂しさ、それはどんなに尊いものであらう。たゞひどんな小さな働きでも、「全力を盡

してゐる」と云ふことに心付いた時、私は心から云ひ知れぬ嬉しさと誇らしさを感じるのです。全力を注いで眞面目にやつたことであつたら、事の太小や、結果の善惡なんかは別として、どんな小さなつまらない事でも、少しも恥を感じることはないと思つてゐますさうして最後に得た樂しさ、慰安：

それこそ眞に尊い努力の賜ではないでせうか。

逝く秋

一甲居長英三郎

秋は遂に逝つた！僕の最も好きな秋は遂に、散り行く木の葉と共に何處へか去つた。そして其の後へは寒い／＼冬が僕等を訪れた。木々の梢を黄色に、紅に美しく彩つて居た木の葉も、吹く北風に、はら／＼とかすかに音立てゝ、一葉落ち、二葉落ち、終には梢に一枚二枚と寂しく其の影を残す程になつた。又東にそび立つ伊吹の峯も、毎日、夕日の光をあびて白銀色

先日雪が降つてからは、目には見えぬが心からか、

めつきり寒くなつたやうだ。葉の落ちた梢が、寒い北風に吹かれて、さも悲しげに聲を立てるのを聞くと、思はず、首を縮めざるを得ない。寒い風は終日吹荒んで、自然の暴威を逞しうして、僕等を苛める。僕は悲しい、秋が去る。それが第一に悲しい。秋は僕にどつては最も良い時だからである。冬が来る。寒いのが嫌ひな僕には、第二にそれが悲しい。冬がいやなのでは無い。白い雪が降つて、地上が一面に美しい銀世界となる。其の冬がいやなのではない。唯寒いのがいやなのである。「冬」から「寒さ」を除き得たならばと僕は時々思ふ。

秋去りて散りし黃色の木の葉哉

吹く北風の寒きに堪へず

(一九二三、一二、六)

初 冬

一甲 野 村 貞 三

「冬だ。冬だ。」さう思ふと、よけいに寒い。も早や銀杏の葉も残りすくなになつて、吹く木枯は身にしみ

しい初冬の世界を寒く吹いてゐる。

あゝ森羅萬象何處を眺めても物悲しい感情がしみじみと湧く。つい此の間迄紅葉した雜木の葉で賑つて居た庭も木々の葉はひら／＼と惜氣もなく地上に落ち冷たい風の風に舞ひ翻つて居る。未だ一霜毎に寒氣が加はるのである。

殘月冷く微かに、淡青い初冬の曉の空にかかるつて明星の影も消ぬ天地漸く白むだ曙の地上に初霜の満ち々々てゐる朝の風景もたまらぬ寂しさがする。又晝のうそ寒い太陽も小鳥の囁も物寂しい。夜の静寂な世界を青白い月の瞳が冷たく光を投げるのも尙更物哀れである。おゝ初冬の寂しさは又格別である。

冬は悲しさ寂しさ寒さ其のものである。暁々とした白雪も積る。みぞれも訪れる。或は又風じみた悲哀の韻律を送る陰氣な小雨も降る。而し私等の思想は激渾とした若人の意氣が流れてゐる、さうして大宇宙の分子としては立派な、或は大日本の一國民としては確固たる國民思想を發揮して震災のために、もろくも大打撃を受けた帝都復興を志さなければならない。例へ其の力は微小にせよ、或は術は拙くとも其の考察は乏

て寒い。夜は又特に寒く、霜の降るのは毎晚のことである、雪も一度降つた。學校では近頃控所に火の用意をした。學校ばかりでなく、方々の家々も防寒の用意をしてゐる。

遠山は皆眞白になつて、つひ此の間まで山々を飾つてゐたあの美しい紅葉の景色はもうこれからは見られない。もうしばらくすれば、大地はすべて銀世界と變るだらう。どこもかも雪にうづめられて、世は淋しくなるだらう。そちらの枯木は吹く木枯にうなつてゐる茶色の葉がちら／＼と散つて空に舞ふ。

松は此の寒さにも屈せず、青々と常盤木の操を立ててゐる。我々も此の位の寒さに屈せない元氣を以つて風や雪と戦ひ、大いに勉強をして、此の二學期は全甲をどらねばならぬ。

初冬を迎へて

一甲 高 祖 保

真紅に紅葉した暮秋の萬象をさら／＼と微かに訪れてゐた秋風も何となく冬めいた木枯しの風と變つて寂

しくとも……

初 冬

一甲 圓 城 佳 逸

あゝ冬だ。ほんとうに冬だ。北は伊吹東は龍山に至る迄こと／＼と白冠をつけた。空には綿をちぎつた程の雲がふは／＼と浮んでゐる。校庭にあるぼぶらは葉を二つ三つ残したのみで恰も簪を立てた様になつてゐる。庭におちた、柿の葉は今迄ぬるい太陽の光に照されてゐて満足の色を見せてゐたが軽てひゆ／＼と吹く木枯に行手定めずころ／＼と或は縦になり或は横になりして飛んで行つた。柿の葉ばかりではないすべての落葉が皆音たてゝ散つて行つてしまつた。後には小石ばかりが茫然として残つてゐる。田圃のあぜに植ゑられた豆の葉は、この間の霜の降つたせいか今では上部に墨汁を落した様に黒く、しな／＼としてゐる。あ、なんといふあさましい初冬であらう。

初冬を迎へて

一乙 高 煙 純

秋の朝

一丙 中村誠一郎

春去り、夏去り、秋も去つて、皆が着物を重ねる時
が來ました。

伊吹山は早や此の間から白い着物を着て元氣なさ
うに毎日雲に包まれてゐます。それは十二月一日の事
でした。朝起きて見ましたら雪が降つてゐました。多
分三時頃から降りかけたのでせう。

裏の桑畑の桑の葉が、ひどい霜の爲に眞白になつて
二三枚「かさ、かさ」と音を立てて落ちましたが、其
の後は何の音もせずしーんとして何となく淋しい感
じがします。暫くすると雀が「ちゅ、ちゅ、ちゅ」と
鳴き出します。晝の真最中でも北風は身を切る様に寒
く、夕暮になると一層寒くなつて、古枯の吹きつける
柿の木で鳥が淋しさうに二聲三聲鳴いて西の山へと飛
去りました。

夜は月がきら、さらと輝いてゐて、電信の針金には
北風が「びゅ、びゅ」と凄い音をたててゐます。それ
を聞くと身がちぢまつて一層淋しい様な感じがします

「チリンチリン」と枕時計は僕を呼び起した。僕は睡
い眼をこすりながら衣服を着た、時計は六時、電燈は
まだあかあかと臺所を照してゐる、外は薄暗い「がら
がらがら」ご何處か雨戸を開ける、あたりはしんとし
てゐる、やがて車の音が遠く聞えて來た。

僕は獨り朝飯をすませて靴をはいた、電燈は消れた
があたりはまだ薄暗い、「ボーッ」と汽車の氣笛の音
がはつきり聞れる、暫くすると「ゴーッ」と汽車の走
る音が西北の方に聞える、「かんかんかん」と智善院
の鐘の音が静かな秋の朝の空にひゞいた。

「行つて参ります」と表へ出た、空は曇つて一面灰

色になつて今にも落ちさうに見れる。ニツコツと僕の
歩く靴の音は何時もより一層高くひゞく、新聞配達が

向への戸の隙間へ挿し入れて溝ぶたを「ざん」とふん

で行つてしまつた。

秋の朝は静かなものである。

冬が來た

一丙 中村榮二郎

黄に紅に林をかざつてゐた木の葉も、大方色あせて
木枯の風に吹きおとされて、鶯色となつてゐる。家の
紅葉やボブラーの葉は蝶の舞ふやうにひらひらと散つて
地に布きつめてゐる。杉の木の上に今朝も二三羽の雀
がとまつて、寒いのかぢつとしてゐる。黄菊白菊もい
つしか盛りも過ぎて、追ひ／＼しほれて、紫がかつて
ゐる。家の東に柿の木がある。今は葉も大方落ちて、
小さな實が三つ四つぶらさがつてゐるばかりである。
見渡せば遠い山のいたゞきは雪で白くなつてゐる。
まことに冬らしくなつた。近山はまだ青々として、遠
山が雪で化粧したのを見て、うらやましさうに眺めて
ゐる。むかふのこんもりとした森の中に、赤い紅葉し
た木が、はつさり見れる。廣い田の面は切株ばかりで
農夫が頬がぶりして、うねを作つてゐる。稻村の上に
鳥がとまつて、さつきから少しも動かない。裏の畠の
菜や、大根は活々として、こゝばかりは秋もすぎ、冬
になつた様を知らないやうである。

初冬を迎へて

一丙 中川英一

伊吹の山にも雪が來た。我々の村にも同時に、冬が
訪れて來た。美しかつた紅葉も、もう汚ならしい色に
なつて、伊吹おろしの寒い風に散らされてしまつた。
木々間には常盤木が目立つてみえる。

初冬を迎へて間もなく、僕等は試験があるので。寒
い夜に調べることが出来るだらうか。

藁を取り入れる農夫、大根を引く人、冷たい流に蕪
や大根を洗ふ人、松の木と木の間へ、竹を差渡して大
根を干す人等、冬ごもりの用意になか／＼忙しい。
『冬物大賣出し』と書いた廣告が、半分破れて、風の
ために散らされて行つた。刈田で凧を揚げてゐる少年
も二三見受ける。

冬の朝

一丙 漢見覺了

寒い朝だ、と思ひながら家を出た。外は雨すじりに

as if on the wings of a dream, but of course in reality, five years is quite a big slice out of a man's life.

文苑
We finish our school course amid the kind instruction of our teachers and the warm well-wishes of the comrades whom we shall leave behind to follow in the path we have trodden, we shall always cherish the memory of our friends in the school.

We realize that our school-days have been merry ones, and we grieve that now we are on the point of saying "good-bye," "good-bye".

But on the other hand we are now bathing in the warm light of boundless hopes. Ambition is one of the most cherished characteristic of youth. We are going to enter the other world with a great stock of knowledge, ability and health; we are determined to work with all our might, and will overcome every obstacle that may stand in our way; and we shall surely realize our ambition to develop Japanese position and make Japan mighty, as well as to contribute a great deal to the peace of the world.

In conclusion, we all wish to thank our teachers for their careful instruction and our comrades for their friendship.

May God bless all with whom we have associated.

Fifth year, C Class.

K. NOSE

雪さへ降つてゐる。二三歩行きかけると冷にきつた風がさつと頬をかすめた。「おゝ寒む」と思はず口をすべらし外套の襟に顔をうづめた。銅像前までくると、いつのまにか雪ばかりになつて風と共に真正面から吹きつけるので、鼻や耳が凍りつくほどつめたい。この寒い朝もやはり野菜の販賣をやつてゐる。いつもよく見える城山はほんやりとして鳥一羽飛んでゐない。昨年の雪降のときなど、又新らしくむかへる正月の事など思ひうかべながら學校に着いた。



Graduation Address.

5. C. K. Nose

Respected Teachers and Dear School boys; —

We feel truly that we must bid farewell to you on this moment; but in a few days we shall graduate from our beloved school and part from all of you who have for many years brightened our lives.

When we look back, we can remind ourselves of five years ago when we entered the school in April of the 8th of Taisho.

As you all know, there is an old saying "Time flies like an arrow".

This period of five years seems to have flown away swiftly



紀

六

修學旅行記

一増田源太郎
一山村禎太郎

五月廿二日、待ちに待つた其日は來た。楽しい東路の旅を試みる事が出来るのだ。一行六十餘名は準備萬端整へて汽車の來るのを今や晩しと待ちかまへてゐる。午後六時三分汽笛一聲彦根の驛を後にした。日頃仰いでゐるあの懷しい金龜の御城は、立罩めた夕靄の中に次第々々に薄らいで行く。思へば何だか悲しい。汽車は無心に東へ東へと走つて早くも故國の境も過ぎて大垣驛に着いた。も早や日はとつぶり暮れて窓外には點々たる星の如き電燈の隱見するのを認めるのみである。車内は元氣溢る、彦中健兒の樂しい雜談で漲つてゐる。彼方には二三人のグループが大聲で歌つて居り、此方

にはハーモニカを吹きすさんでゐる音樂家もあつて、いづれも更け行く夜も過ぎ行く所をも全く意識しない時々眠さうな驛夫の叫聲を覚えるのみである。東海道の難所なる大井川、越すに越されぬとまで謠はれてゐる其川も我汽車は轟々たる音響と共に僅か數分にして通り過ぎた。雲助の肩に乗つて横切つた昔の事を思へば文明の有難さに涙がこぼれる。三國一の富士の勇姿も夜中の事とて賞する事が出来なかつたのは如何にも残り惜しかつた。草木も眠るてふあの一二時頃になると今迄の喧しさも次第に衰へて、皆可笑しな恰好をして參つてしまつた。搖籃ならぬ車中に一夜は明けた。皆青ざめた眠さうな顔してゐる。目の前には箱根の連山が黒づんで横つてゐる。兎角する中に汽車は靜に國府津驛には入つた。乘換には少し時間の餘裕があつたので松並木に沿つた淋しい町を横切つて海岸へと出た海面は黒ずんで彼方には伊豆半島が突出してゐる。最早二三の漁舟も見ゆる。一同子供に返つて此所に暫く戯れ込んだ。

五月廿三日、午前五時小田原に向ふ。酒匂川に一宮翁の在りし日を憶ひつゝ朝食の箸を取り、その漸く終

る頃には最早小田原に着いた。直ぐ電車に乗つた。小田原と云へば誰でも小田原評定とか、小田原提灯とかを聯想するが、長いものは小田原の名物らしい。道理で町も仲々長い。所謂フンドシ町だ。そしてよい町ではない。がた／＼搖れて電車は郊外に出た。左手には小田原征伐の際太閤が陣營を築いたといふ石垣山の高く聳ゆるを仰ぎ、右手には蘆の湖から流れ落ちる早川の清流を愛でつゝ漸くにして湯本に着いた。此處からは登山電車の使あるも我等一同健脚徒步にて四圍の光景を眺めつゝ登る。朝來どんより曇つてゐた空は遂に雨となつた。我等は名にし負ふ箱根の山麓に來たのだ。一同は往時を偲んで血湧き肉躍るを禁する事が出来ない。雨中勇を鼓して一步々々と辿り初めた。仰げば峨々たる群山天を摩してそり立ち、俯せば千仞の幽谷前に横り、或は後に控へ神斧鬼刀を以て刻んだ大磐石の下、溪流逆ばしり岩石に激し玉と碎け雪と散り右折し左折し或は分れ或は合す。實に奇。實に壯。一同恍惚としてしまつた。いかなる大文豪大畫家も到底之を筆にする事は不可能であらう。豪雨に悩まされ乍らも大平臺、宮の下等幾つかの温泉村を通り過ぎて先

づ底倉なる仙石屋に着いた。荷物は此處に置一食物を携へて箱根の勝を極めんと出かけた。先づ數町上なる強羅公園へ。こゝは小田原電氣鐵道會社の經營に屬し和洋折衷の遊園地で天然の勝と人工の美と相俟つて風致に富んでゐる。一巡して外へ出た。尙も春雨は情なくも降つてゐる。岩石磊々たる坂道を鳴き鳴き攀ぢ上つて九十九折の小徑に來た。降雨の爲つるくになつてゐるので幾度滑りこけ様としたか分らない。大涌谷迄はまだ甘町もあると聞いて閉口する。四方の山々は雲に蔽はれて茫として見ゆない。登るに従つて嫌な悪臭が鼻を衝く。もう直ぐらしい。蒸氣が見ゆた。我行手には一大地獄が展開された。愈々目的地たる大涌谷へ來たのだ。我等の心は踊つた。一同思はず快哉を叫ばずには居られなかつた。數多の孔から盛んに硫化水素、水蒸氣、亞硫酸瓦斯の混合氣体が噴出してゐる。附近一帶には硫黃華が多量にくつゝいてゐる。四所には土色をした熱湯が湧きかへつてゐてだく／＼音を立てゝゐる。洋服の釦も銀の時計も茶褐色に變つてしまつた。何たる壯觀だらう。何たる悽愴の光景だらう。今にも爆發したら? 思へば身振ひがして一刻も早く

此處を逃げ度くなつた。此魔所に一軒の茶屋があるが何と心細い事であらうか。下り坂も非常な泥濘で靴もしずむ位。洋傘は破れズボンは泥まみれ全く閉口したやつとの事で湖尻についた。見れば我故國の琵琶湖の弟の様な可愛らしい湖がある。晝食を喫して後三隊に分れ、一隊はモーターに他の二隊に和船に分乗してモーターに引かれて此の湖を横断した。湖面は鏡の如く水は紺青に澄んで山岳樹木盡く倒に沈んで實に絶景である。晴天なれば八面玲瓈たる富士の姿を仰ぎ、倒富士の壯觀を稱へる事も出来るだらうにと一同殘念に思つた。約一里餘りの船路を寒さに慄ひ乍ら漸くの事で本箱根に上陸した。舊街道を辿つて關所の跡に出た。彼の支那の幽谷關と併稱せられた險、足駄がけの古武士。一同はそのかみを偲んで感慨無量である。併し今は星遷り世は變つて自動車の塵を蹶立てゝ走り去るを見るに至つた。嘸老杉も世の變遷に驚いてゐる事だらう。關所の跡はと見れば、小高き所に苦蒸す石僅に残り傍には一本の松の木のみ聳にてゐる。「見かへりの松」といふのださうだ。往時を語るものゝ様だ。吾人は低徊顧望去るに忍びなかつた。こゝを去つて權現へ

参拜した。古木鬱蒼たる幽邃の地を占め瓦葺朱塗の社殿が霧の立ち罩めた森の中に隱見する有様は如何にも神々しい感じを起させる。これで箱根見物も了へ歸途に着いた。新道なるが上に雨水溜り自動車の往來繁くして歩行に非常につらい。蛇行式の坂道をいくら上つても上つても道は盡きない。雨は車軸を流さんばかり降り、しまひにはもどかしくなつて杉林の中を通り抜けて少しでも近道をする。知らぬ間道を辿つて急ぐ一同の横着さ。あちらこちらと迂廻して漸の事で宿へ歸つた。隨分歩いたものだなとあきれざるを得ない。よくも歸れたものだ。大分可笑しな道を取つて迷つたものもあつた様だ。時に午後五時も過ぎて居た。洋服はすぶ濡れ、足は泥まみれ、身體は綿の様に疲れてしまつた。早速湯に飛び込み疲も打ち忘れ一同夕餉の膳に向つて舌鼓を打つた。食後の茶話會は仲々盛會で皆疲勞の身も忘れて打ち興じた。

五月廿四日、静かな山間の温泉宿に廿三日の夜は明けた。二階の欄干に凭れて見渡す景色の美しさ。前の新緑の山には霞がかゝつてゐて眼から覺めつゝある。氣持のよい朝の冷氣が面を吹いて目も覺むる位である

宮の下に電車に乗るべく宿を出た。然し土地不案内の爲反対の道を取り豫定の電車に乗後れた。仕方なく次のを待ちて乗る。電車は冷汗の出る様な斷崖を徐々に下つて行く。藤澤驛で下車し電車に乗る。其窮屈な事押しつぶされさうだ。疎々たる松林を見せ或は青い菜畑の間を縫つて暫らくの中に片瀬に着いた。乃ち電車を捨て海岸に出た。見渡すと彼方の海波中に繪の如き島が浮んでゐてその温容は遊子を招くに充分であるこれが即江の島である。あの長い「棧橋」を渡つて島についた。涼しい海風が顔をなでる。

先づ神社に參詣する。道の左右には數多の賣店が立並んでゐる。そして若い女等が店先に立つてしまりに

「御土産の品御覽遊ばし繪葉書は如何ですか」

「名物の壺焼御食りなさいまし。」と口八ヶ間敷客を招んでゐる。彼の膝栗毛中の喜太八ではないが

「名物の壺焼とてや店女

「口をすぐして客を呼ぶ呼ぶ。」と駄目つたしつこい口振りを逃げる様にして稚兒ヶ淵へ出た時にはほつとした。危岩に刻んだ細道を辿つて岩屋の前へ出た。五錢奉納して中へ入る。海水は中まで入込んで

濃緑色を呈して美しい。少しばしは入ると真暗だから蠟燭を買つて中腰になつて進む。進むに従つて狭くなる。岩にはブリキが覆つてあつて水滴がぼと／＼落ちるのは氣味が悪い。奥には辨天様が祀つてある丈だ。これで江の島の見物を終つた譯である。岩頭に腰を下して蒼茫たる海原を眺めつゝ食べた辨當は實に美味かつた
江の島や薰風魚の新らしさ

乗車の時間も切迫したので此島に別を告げて又元の所に引き返し長谷へ向つた。七里ヶ濱の浦波は右に見ねる。屋根の上に貝殻の乗せてあるのも亦趣が深い。
先づ觀音堂に詣つた。堂内に入ると像は薄暗い所に安置せられてさやかには見られない。此を出て大佛を見物する。參差たる松の木の間を進むと巨大な青銅の盧舍那佛が屹然と聳にて居る。所謂濡佛であつて今に至る六百餘年を経るも慈容依然として「時」の何たるかを知らない様である。その像の中へは入ると阿彌陀が安置して小階子があつて達する事が出来る。こゝから又疲れた重い足を引きずり乍ら鎌倉へと志した。雪の下をすん／＼進むと松樹の点綴する間から數十級の石階の上に聳いた朱塗の社殿が望まる。これが有名

な鶴ヶ岡八幡宮である。石段を上ると左手に青葉滴る大公孫樹がつき立つてゐる。別當公暁が此處に身を隠して實朝の參詣の歸途を要して害した事は吾人の普く知る所である。若宮は靜御前が頼朝の命によりて止むなく白雪の袖を翻し。

賤やしづくの苧巻くりかへし

昔を今になすよしもかな

吉野山峰の白雪踏み分けて

入りにし人の後を戀しき。」と歌ひ夫義經を慕ひ坂東の荒武者を泣かせた所である。次で鎌倉宮に參拜する。瀟洒たる白木造素朴なる社殿雅致ある境内は吾人をして思はず襟を正さしめた。護良親王の幽閉なされ給ひし土牢は社背に在る。廣さは凡入疊ばかり二段の石窟で薄ぐらい。畏れ多くも南朝の王子が足利直義の兎手に恨長き最後をお遂げになつた所だといふ社側に一建物があつて親王の御遺物が陳列されてゐる皆思ひ出の深い極である。急いで頼朝の墓に詣でた。墓は小丘陵の中腹に在る。四圍は榛蕪に閉され苔深く蒸した五輪の塔の小さいのが建てられてある。落葉は積むに委せて拂れず、又子孫の一漿を供する者もない

様だ。

嗚呼榮枯盛衰は夢か、昔は霸者として海内に號令せし英雄も今は空しく五輪の一小塔を残して地下に腐れ果てたのである。尙見るべく探るべき古蹟は多いが時間の餘裕がないので午後四時廿三分發列車に投じて惜しくも鎌倉に別れを告げた。横濱は下車見物に及ばず窓から首突き出して眺めると、すつと彼方市の涯に幾多の大小軍艦商船が碇泊してゐて帆檣林立し何となく盛んな海港といふ感じを起させる。五十年前まで人家がチラホラ見ゆるばかりで淋しかつたといふ一漁村が斯くまで發達するとは全く夢の様ではないか。東京横濱間には京濱省線兩電車が通じてゐて皆競争的に忙しく走つてゐる。汽車は東京行の人が大分込んで來た。兎角する内に汽車は東京市内をひた走りに走つて午後五時四十四分列車は大東京驛のプラットフォームにすうと止つた。憧憬の帝都に來たのだ。先輩諸氏の案内を待つて先づ丸の内ビルディングを仰ぎ見て今更ながら其の壯大さに肝をつぶした。先づ我等は二重橋の袂に來た。一同整列して我が大君の在す九重の天を伏し拜み聖壽の無窮を祈つた。お濠に沿ふてすんく進んで

行くと櫻田門がある。藩主井伊直弼公遭難の地だ。附近一帯には數多の諸官廳整然と軒を列べ驚くばかりで外國にある思がある。實に今昔の感に堪へない。日比谷公園も素通りにして出で交通のはげしい幾つかの街路を通つて神田の有恒館に着いたのは彼此七時過ぎであつた。今や大東京は電燈が美しく輝いてゐる。夕食も了つて各自見物と洒落込む。何といつても神田は學生街古本屋街だ。夜學生が列を組んで行く。一同の或者は古本屋を涉獵してゐる。淺草の觀樂の街に奔る者もある。銀プラを試みる者もある。不夜城の帝都に驚いて天晴赤毛布を發揮した者もあらう。

廿四日の夜を永遠の過去に送つて目を覺ますと雨がしどく降つてゐる。朝食も済まし悲觀しながら泥濘の街に出た。今は嬉しい花のお江戸の見物だ。雜踏する通をびくくもので歩いてお茶の水へ向つた。登校時と見えて學生が行くが出合ふのも出合ふのも皆角帽だ。済まし込んでさつさと歩いて行かれる。矢張り東京は學術の中心だ。まああれ丈よく集まつたものだと驚かざるを得ない。暫くにして目的の停留所へ着いた省線電車で代々木に向ふ。勿論途中山手線に乗換へね

ばならぬ。代々木にて下車明治神宮に參拜する。小砂利の敷かれた坦々たる大道を進むと大きな檜作りの華表の前へ來た。境内は老樹鬱蒼たる古風は見る事が出来ないが壯嚴なる社殿廣大なる境内は誠に神々しい。拜殿前に整列して御偉業高き明治大帝の在し、昔を偲びて暫し無言の御祈を捧げた。慎みて御前を辭し近くの寶物殿を拜觀した。寶物拜觀を終つて後電車にて牛込に向ひ靖國神社に詣り國家の爲、命を鴻毛の輕きに捨てた幾多の英靈に額づいた。こゝで暫時休憩の後井伊伯爵邸を訪れた。邸は麴町區にあつて此處からは直ぐ近くである。立派な御住ひだ。家令と思はしき人が「ようこそお出で下さつた。」と先づ挨拶された。一同は座敷へ通された。立派な御庭に臨んだ大きな室だ。御話しに依れば殿様は彦根へ歸つてゐられ若様は學習院へお出で遊ばして留守であるとの由。山本先生が一同を代表して挨拶せられ茶菓の饗應を受け其の上晝食を頂戴した。直弼公御自筆の和歌紀行文其他自ら御研究遊ばされた書を面のあたり拜見していたく感心した一同深く厚意を謝し夜十一時歸宿を約して解散した。一同は先輩諸氏や知邊の案内で自由に見物す。先づ靖

國神社境内にある遊就館に入る。陳列品は只目を驚かすばかりである。泉岳寺に義士の墓を訪れた。流石に義士の墓香華の絶わるこなく永く日本武士道の精華として譽を残してゐる。三越のデパート、メント、ストアには入つて故郷への家芭を數多買つた者もあらう。半日間の東京見物は忙しく目が廻る。夕食も済して夜は觀樂の巷・淺草へ。先づ兩側に立ち並んだ仲見世に驚く。樓門に吊つてあるあの大きい提灯には誰しもあつと叫ばざるを得ない。觀音に參拜して向ふの寫眞館の所へ出る。先輩諸氏の厚意で一同見せて貰つた赤い灯青い灯の燐として輝くを眺め妙へなる音樂に一同は醉つてしまつた。兩國橋の袂に來た。兩岸の電燈が河水に映じそれが波に碎かれる様は非常に美觀だ。都の河の景色は晝よりも夜が一層奇麗だ。總ての醜は隠されて只美だけが表れる。何時までも眺めてゐたい電車に乗つて上野公園に向つた。静かな不忍池畔を歩いて中島なる辨天に參詣す。大きな仁丹のイルミネーションが池に映じてゐるのは田舎者を喜ばすに充分だ時間に制限があるので證方なく宿に引き上げた。歸る伊藤先生が來て居られるとの話。「宮城拜觀の許可

書を持つて來られたのだらうか。」「何か學校に起つたのだらうか。」「郷里がこちらやで歸つた序に來られたのやろ。」色々と噂どりく。又今日の見聞談で一しきり賑はふ。

五月廿六日 早朝宿を出て小石川なる砲兵工廠に向ふ。一同其の廣大なる規模に目を驚かす。工場へ入ればギーギードン／＼と耳も聾せんばかりに機械が廻轉し數多の職工が熱心に作業に從事してゐる。幾つかの室を參觀して後隣りの後樂園を巡覽する。此處は元水戸邸の庭園であつた所で今は保存せられて一般の巡覽を許してゐない。全國の名所に准へて作られた市内の名園である。隨意中食をして一時半迄に上野驛に集合この條件付で解散した。自分等は上野の帝室博物館に入つた。精しく見れば容易の事でないから、走る様にして見て廻つた。

上野驛二時……分發列車に投じ日光に向ふべく花の都を後にした。汽車は市内を出で廣漠たる田甫の間を走つてゐる。一同は數日の疲勞でうと／＼とやりかけた。汽車はごん／＼走つて今、阪東太郎の名を負ふ利根川に差しかゝつた。水は靜に流れ兩岸には茂く生

ひ。彼方に浮んでゐる白帆は丁度鷗の様である。宇都宮も過ぎて文挾驛に至ると一帯の山獄は最早や車窓の眺めに入り汽車は山又山の間を駆進してこう／＼日光に止つた。もう日は暮れて日光の町には電燈が着いた狭い日光の町を五六町も歩いたと思ふ頃宿屋の前に來た。名も神々しい神橋館だ。東京の繁華に醉つた一同は日光の淋しみ否閑寂を祕々と味つた。夜は我々の安否をきづかひ、歸りを待ち詫びてゐる郷里の父母兄弟なごの土產物をあさつた。間々電車が少しの客を乗せて往き來してゐる。

五月廿七日、長途の旅行も今日一日かと思へば何だか名残惜しい。町はずれの停留所へ集つて電車を待ち合はせた。すぐ前には大谷川の急湍が遙り左には神橋が架つてゐる。朱の欄干金の擬寶珠は碧水に映じて如何にも崇高な感じがする。待つこと暫くにして來た。早速飛乗つて馬返に向つた。粗末な電車はがた／＼搖れ乍ら山麓をうねり曲つて終點についた。生憎又降つて來た。天道は殺生だ。山登りとなるといつも雨／＼降る。幸橋榮橋を渡りて爪先上りに行く。華嚴の瀧まではまだ二里あると聞いてうんざりする。然しながら道

は平坦で坂もあま、急でないから人力車も通つてゐる瀧に行つて來た人と何人も出合つてしまつて心が踊る漸くの事峰の茶屋の横へ來た。その前を降りて行くのであるが、道は羊腸の小徑である。その上、石がころ／＼してゐて轉びさうだ。どう／＼といふ瀧の音が四圍に響いて來る。途中に霧降瀧がある。晃山の瀑布の上で最も綺麗であるといふことだ。そして華嚴瀧の男性的なのに對して女性的なのが此瀧の特色だ。此の瀧の上に架つてゐる橋を通つて少し行くと華嚴の瀧が見える。音に聞えた華嚴の瀧は澄みきつた山間の空氣を破つて大音響を立てゝ深谷に落下してゐる。直下四十丈といふ。草木は震動し岩石は碎けんばかり飛沫は霧となり、去つて雲となる。其の壯大雄麗は宇内無比といふとも過言でなからう。

あら瀧や満山の若葉皆震ふ

夏目漱石の句を思ひ浮べる。又元下りて來た道を鳴き鳴き上つて茶屋で少時間憩うて中禪寺湖へと足を運んだ。この湖は東西三里南北一里周圍は七里餘りで風光明媚なことは箱根の蘆の湖と伯仲の間だ。

右には富士の如き男体山が白雲を拂つて聳にてゐる

山を下つて湯本の茶屋にまづい館飴をすゝつて腹を掩へ、東照宮に向つた。時に雨は益々はげしくなつた。

先づ三代廟に次いで東照宮に参拜した。彼の黒田長政が献じたといふ大華表をくどつて進むと、西には五重塔があつて直ぐ表門の石階がある。内に入ると神庫燈籠、御洗水の石盤などいづれも燐爛たる光を放ち眩き程である。有名な陽明門は目前に屹然と聳へてゐる其の美しく彫刻した欄干、殊に天井の狩野探幽の筆による昇龍降龍の畫は墨痕淋漓として異彩を放ち、日本美術の粹は皆此に集められた如き思がある。誠に日暮門の名のある所以である。廻廊を進んで拜殿には入つた。惣金だゝみの柱、美しく彩色せられた長押、或ひは唐草の蒔繪を施した唐戸等有らゆる美を盡した事は古人の言葉通りだ。「日光を見ざれば結構を説く勿れ」と稱せられるのも道理だ。瀑布あり、湖水あり、山あり、加ふるに殿堂樓閣の美があつて一として缺けたものはない。幾組もの參詣者の團体が屬々やつて来る。日光探勝も大異了へ午後三時八分盡きぬ名残を留め日光を發した。上野驛へは夜の七時頃に着いた。十時半に東京驛を立つ豫定であつたが都合で一時間遅く

なつた。一同纏て去らんとする不夜城の帝都を彷ひ憧れたのであつた。

乗車すべき時刻となつたので一同卒業生諸氏に送られてプラットフォームに出た。おゝ花の都よ。いざさらば！先輩諸氏よ幸多かれ。汽車は静に驛を離れた一同は去るに臨みて一種云ふべからざる感じに打たれた。幾度も幾度もふりかへつた。然し汽車は歸途の一回を乗せて只無心に暗黒世界を走りつゞける。かくて一同が無事に故山に歸つたのは午後十二時過であつた。此長い旅行記を結ぶに際して旅行中色々お世話になつた先輩諸氏に御厚志を深く、感謝致します。

一九二三一一二一九

白馬嶽登山の一節

岡村六助富藏郎
堀川辰之郎
橋詰與三郎

麓まで

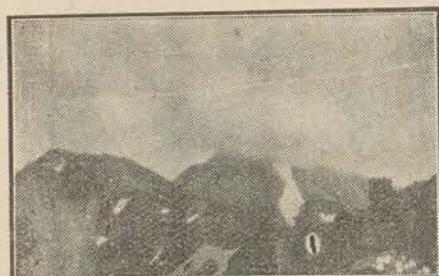
汽車の音が深夜にゴトン、ゴトンと異様にひびく。汽車が停る様が氣がする。故障か、坂でもあるのか

の大変。思ひ出すに其あまりにみぢめな、そのあまりに惨たる、恐しい其刹那。其様は到底口にし得ない。到底筆にし難い。

夜は明けた。然し濃霧は一寸先をこめてゐる。

汽車は危険區域を除行した爲め一時間半程おくれて松本の町に這つた。濃霧は一時は甚しかつたが我々が信濃鐵道に來かかる頃には全く晴れて朝の光も大分高い。此松本から出る信濃鐵道は全く近江線を想像してよい。此鐵道はガタゴトゝ遅いこと、近江線そつくりだから驚く。謂はば登山鐵道、アルプス鐵道だ。日本アルプスの雄、穗高・槍・常念・白馬皆之によるのである。

漸く終點大町に着いた。二十人餘りの登山家が物々しいてたちで降りる。我こそは日本アルプスを縦走した者だが、ついでに一寸白馬へ行くんだ、とでも言ひそうなスタイル。自分は槍へ今年で五度登つたとも言ひたさうなあるき振り。其等の中に加はつて、純白のツンツンした服の一團目が



車中の人々がバタバタ窓を開けて首をつき出す。車體が妙にガタ付く。赤い危険信號燈がにぶく光つてゐる何だらう。鉄橋が落ちたので砂俵を積擧げた俄造りの鉄橋なのだ。

兩岸の真黒い川に接してゐる木曾川の墨を流した様な水の面に、沈みかけた月が、物凄くキラキラしてゐる。汽車は此左岸に沿つて走つてゐる。線路に面した山は、見よ、中腹からなだれてゐるのだ。あゝこの川の巨岩巨石が此線路を埋め、鉄橋を壊したのか、岩石の流れは木曾川の片側を埋めてゐる。巨岩か、怪物か、と思はれる機關車が木曾川の川岸に横はつてゐる。何とか言ふ驛は、全く山崩の爲埋つてしまつた程、砂が積まれてゐる。いや全く埋つたのかも知れない。幾百の工夫達が異様な顔して出る列車を眺めてゐる。

斯様な場所は數驛に渡つてゐる。數へきれぬ奇異な有様が我々の目を襲ふた。

物凄い山崩れ。一週間前、世上を驚かした、中央線

を引く。ルツクサツクを背負ひ、アルベンストツクを持つてゐるのは甲斐／＼しいが、どこどなく貧弱な感じがする。然し其心の中には鬱勃たる何者かがあつた。

見よ、一中の徽章が白馬山上に輝く時を。

これから愈々テクシ／＼は初まる。

此の大町からは坦々たる道六里。文明の利器は此の山奥にも發達して居る。が自動車に乗つては面白くない。あるけ。

土用最中の炎威は天地を焼き爛らして生あるものを、悶殺せんば己むまじき勢ひである。信越連峯の襞皺に不斷の雪を藏して居つたのが一道の巒氣化して蒼生の上を蔽ふご爽涼夢よりも淡く、衣袂俄に輕みを覺いた。

やがて穗高・常念・有明・蝶ヶ嶽・爺ヶ嶽の連峯は漸く藍靛の間に没し去り、僅かに白銀を蒼穹に朝したる乘鞍は亂雲の間に煙つて居る。

木崎湖は大町を出て第一次の驛である。周圍二里、藍膏漫々として一波さへ起らす、湖畔の山々は逆に影を浸し、鬼百合・綿管の咲き亂れたるもの、茅屋の煙



く下り坂となり。二三の村落をすぎて四ツ谷に達した

愈々登山：白馬尻迄

信濃・越中・越後の三國に跨つて大山あり。高さ三

九三三米、一萬尺の高峯、實に坤輿の中樞、萬邦の重鎮、崇高雄偉天下に冠。有史以來三千載歌仙も未だ其

崇高を歌ふを聞かず、畫聖も未だ其雄偉を

畫く能はず。朝日に映じて殘雪白馬の蒼窮

を奔騰するが様である。故に信の士民、呼んで白馬と言ふのである。夕陽を受けては

紅蓮の空際に開けるに似てゐる。故に越人は名付けて、大蓮華と稱するのである。

峯は頗る峻秀で、曾つては凡下の足跡を

印せしめず。時に神仙の藥草を尋ねたのを見たと言ふことであつた。大正の今日登山熱勃興の折、年登山者は凡そ一萬人と豫想されて居る。

谷は甚だ幽邃、曾つて潤濁の水を流さず、潭淵に藍靛をたゞへ、奔湍珠玉を綴つて居る。高嶺には佳木異草あり。庶には珍獸奇獸を見ると言ふ。

七月廿八日、明まだき、霧たもこめた、露の小路、

芝踏みしめながら進む。

朝霧は已に晴れた。天高く氣は澄みて、旭日は遠慮なく照りつける。天涯の銀冠は目前に展開する。丁度手を取つて引かれる様に足は快く進む。

珍らしい白樺の林に差掛ると、突然うぐひすの聲に驚かされる。右に左に前に後に。我々は全くうぐひすに歡迎されたのである。

小路は山の端を右に左に、廻り廻つて一段に着いた。

南股・北股の兩溪流が此の所で合して、松川となり、東へ流れて、名さへゆかしい姫川となり越後に這入つて行く。雲に聳ゆる鑓ヶ岳、谷間に残る千古の白雪、融けて之は南股の溪流となり、白馬の雪も今朝融けて、爰に北股の溪流となる。

南股の奔流上の珍らしい釣橋を渡ると、もはや此地は官有林地である。橋詰の小屋で入林許下證に署名して更に進む。

と山客水態頓に變じて、流水轉石、亦俗界のものでない。其水の清澄なこと、「萬嶽の岩絞りたる清水か

の末の雲を運つたるもの等皆湖底龍城の前栽として布置畫の様である。一寸シャレると『時鳥聲横ふや湖の上』の名吟も偲ばれるところ。

此邊の婦女までも皆雪袴なるものを穿つて居る。之は雪中の運動に便なる爲でありませうが、今は輕便な

るが故に四時常に穿つて居る。形は袴の裳を股引にした様で奇なものである。

路は湖畔をぬぶて右に左に、やがて中綱の湖青木の湖に至る。前者は細長で渠をして居て木崎と青木を繋ぐ媒たるにすぎない。

青木の湖は三湖の中第一位で周圍殆んど三里に近いと言ふ。湖畔には狸藻が多ひ。

湖には鯉・鮒・鯰等を産するから村落には漁りを業とするものもあるさうで斯かる

山中に漁家のあるのは、木によりて魚を求むる諺も思出されて可笑しいことである。

湖の畔のみそぎの紅葉に幾度か目を奪はれながら爪先上りの坂路に及ぶ。所謂佐野坂峠の分水嶺である古戰場の跡とか。海拔二千六百尺。ここから道は漸

な』の子規の句が思ひ出される。そしして山麓帶は全く盡きて、喬木帶に入らうとして居る。名も知らぬ、珍らしい草花の亂れに心引かれる。

細徑は全く喬木帶に這入り斧鉄も曾つては入らなかつた様な喬木帶、合圍の巨幹、高さは數丈、枝櫻密々白晝なほ薄暮のやう。陰濕たる氣が身肌にしつとりして來て、初めて深山にはいつた感がする。究々たる徑、夏草のいやが上に生ひ茂りたる草莽の間をたどり行く。凹凸露岩に其歩行の困難なる事甚しい。

路は再び激端轟々として天地を震撼して居る。北股の溪流に沿ふ。岩の怪、石の奇奔湍岩に激するところ、細霧濛々として立ち昇つて居る。細徑愈々急に、險に、或時は斷崖の端を渡り、或時は木の根岩の根を飛び越ねて、昇り、下り、身は高く低く。特に此の邊で目立つのは、大イタドリの繁茂して居ること。高さ數尺、一面林の如く續いてゐる。

金山の瀬戸、これが登山雪中に遭遇した最初である之を遠望すると、全く龍の白煙を吐く如く、虎の陽氣

などには手軽な食料品を澤山持つて行くべきことである。この我々登山中に於ても、食料品を持つて行くことが少なくて後につらい目をしたことがある。

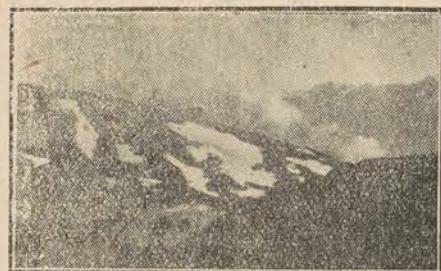
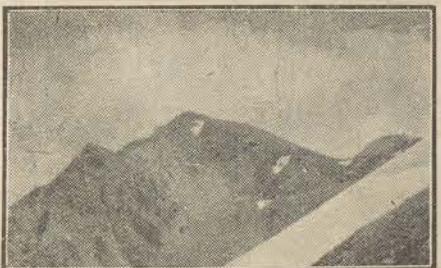
大 雪 溪

漸くにしてこの地邊を見ると、喬木帶はつきて灌木帶へつき、我々は陰鬱から開闊へいらんとしてゐる。例へて云ふと、永夜の眠から醒めて、白日を見る心地がする。一二珍らしい花が咲いてゐたが、淺學のかなしさ、名さへ問はずにしまつた。

北股の溪流もこの處にいたると、全く氷結して、萬古融解しない、冰雪となつて、皓々曠谷を埋めてゐる。いはゆる之が大雪溪、世界無比ではないが、世界に名高い日本無比の大雪溪である。

眠に解るゝ草木、耳に聽く鳥語、全く人界のものではない。嗚呼、我等は已に人間を脱したのである。

大雪溪をへだてゝ杓子の峻嶺は左に聳え、蓮華は巨人の如く右方に峙ち、白馬はかへつて見られないが、葱



を發する様、そのすさまじきこと。全く世外の趣がある。

白馬尻に着いたのは早や晝前、早いつもりが割にあそい。然し今朝宿を出る時一番最後だつたのに、途中で他の登山者を大分追ひぬいて來たらしい。われくがここに着いた時我々より先に着いた人は十二三人ほどしかゐない。今に見よ、頂上までには皆追ひぬいて、第一番に着くぞと口にこそ言はないが、妙に體か品作る。われくが名物餅を食ひ終つた頃人夫は漸くおいついた。まづ宿から呉れた辨當を半分食ひ、腹の虫はすかないが、辛棒してをく之には譯がある。登山家は登山中には決して満腹せずに、すいた頃に度々食事するのだと言ふことである。腹の虫がグーグー云つてもしかたがない。實際之は太ていの人には経験あることである。満腹の時、山登り、遠距離行き、早馳等する時は横腹がいたくなるか、つかれが甚しい。それに引き更へ腹の空いたとき斯様の場合は力がぬけて動けないやうなことがある。だから登山な

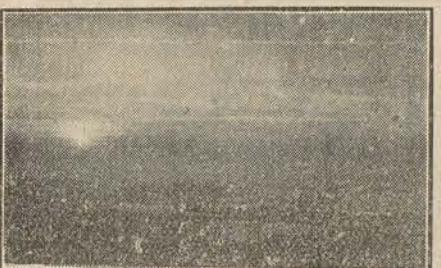
平の鮮綠が遙にわれ／＼をまつてゐて呉れる様である。曾つて山下の村民は白馬を、神聖なる靈山として崇拜し、この山に登る人があるご、山神が其神威を汚さるゝを怒つて、いはゆる嶽暴と言ふのがあると、強風が來り、河水が堤を破り、暴風樹をぬき、五穀がそれがために稔らず、一村飢寒に泣くに至るぞと信じてその昔は一人として登るものなく又山中には、今だに祭神もありません。さやうであるから、白馬尻及び頂上の小屋以外、設備もないから、その途中、雪溪上などて風雨の難に遭ふならば、何人でもほんど、身命を堵しなければならないそうである。

白馬尻よりは全く殘雪の上を行くのである。遙に見える葱平の緑は一寸近さうにみゆる。一寸見ると四五町位しかみえないのである。オヤ石が轉ぶ。いや、そうじやなかつた。双眼鏡ですかして見るとこの雪溪の中程に人が十餘人、すべり降りて下るのである。驚いた、其人が蟻の如くに見えたのには、人夫の話では、かの銀冠は春五月こ

ろから、除々に融けかけて、今では其長さ十七町と言ふ。殘雪といつても下界の雪の如くではない。千年萬年全く融解したことのない萬年雪、その堅いことは岩石のそれ以上か。しかし極く上天氣の日中では表面一寸は漸く融けて普通の雪の様である。

しかし雪の上は平滑ではない。勿論氷結して滑々した所もある。表面に小波状の凹凸があり、たゞへば渚によせる激灘の氷結した様である。だから之を足掛りとして登るのはさほど困難ではない。若し他の高山ならば、胸突き鬚剃りの嶮岨を極むべきである。七八合目の大部分は、この大殘雪の上を行くのである。だから之が白馬登山の容易な一因をなしてゐるのである。

この雪渓は上葱平より一氣に懸下し、實に兩山相対まる急勾配の大谿間を埋み盡くしてゐる。幅廣さは二百間餘り、狹きも五六十間はあるかと思はれる。ところへ大缺陷が生じてゐて溪流が顯はれて居る。其断面は七八尺より丈餘に達して居る。



雲霧は徂來し異卉繽紛として又人寰の景ではない。正に山靈の煙の如く、磅礴する靈域であらう。亂雲が眉間に掠め走るもの、或は人の如く、あるひは馬の如く、鬼形をなすもの、羽翼を生じたるもの等、山より山へ渡り行き、われへ一輩の闖入を急報するもののやうに、草は風に動き、岩は口なきに囁くのである。

忽ち大魔風がサット面を撫でる。其氣豫然として温く、生温きことは、微温湯に浴するやうである。

それは雪の上を吹く風には縞があるそうで、縞の風とは甚だ奇言であるが、つまりそれは雪渓上の冷却してゐるのに反して空中の温暖なる爲に、此様な魔風を生ずるのである。所謂生腥き風とはこんなものを言ふんだらう。

又雪面は鱗狀をして居ります、これは氣候學上の面白い研究材料となつてゐるそうで、其の成因などは確かに解からないそうである。

厚い殘雪の氷層も下方谷底に接するところは、屢々

融解したところがあります。所謂雪の隧道をなしてゐて、溪流轆轤として其下を流れ一奇觀を呈してゐる其美に溺れて濫りに近づけば、雪渓は忽ち陥落し、呀然として人を呑噬するであらう。

大殘雪の傍に數ヶ所に残つてゐる、滑澤鏡の如き氷河の擦痕、今も尚ほ判然と残つてゐる。嗚呼二萬五千年前の擦痕今尙嚴として見ることを得るのである。又未來永劫に消ゆることはあるまい。人は多く世に縷の如き痕跡をも残すことも出來ずして、醉生夢死して死するもの、比比皆然らざるものなしである。ひたすら自然力の偉大に驚いて、人生のはかなきを感じるのである。此の氷河の擦痕も學問上の論材となり、此處にその尊い標本があるのである。

傾斜は割合に緩漫ではあるが、なれないカンヂキをはいて、やゝもすれば滑りさうな雪の上を登り行くことは、容易なことではない。其足の冷いこと。十步進んで片足擧げて足を温め、十五歩登つて休み、遂に十七八町のところを二時餘を費して登り切つた。身は丁度雲に乗つて天上に昇つた覺がする。其愉快なること、其の快心さ。

漸にして葱平に著いたのである。この附近融雪の傍に高山植物が盛んに繁生して居る。其美云はん方もありません。この百草をしばしの躰とした。朝來困難な山路を進んだことであるから、各々重荷の爲眼るもなく眼る。葱平より杓子岳を仰ぐ光景は壯大雄偉を極めて居る。

特に其前面に横わる、傾斜四十度にも達する急峻な大殘雪が氷河の如く、其景をして益々壯ならしめてゐる。

この傾斜四十度の大雪渓の渡渉は、登山中最も危険な場所なのである。各自一步一步その足場を作り、アルヘンストックを力に進む。先に登山した人が、たゞへ態々足場を作つて置いてくれても、一度び風雨襲来すると、跡方もなく平等なる傾斜になつてしまふ。又人の歩いた跡は普通の道ならもつとも安全であるが、斯る場合では却つて危険をともなふのである。ほど中程まで進んだ頃下方を見たならば、先づ氣の小さいものならば、頭がフラフラとして、足をふみすべらし、此雪が大雪渓に續いて居る所の大陥落に轉げ込み、それからはどうなるか、故に斯かる場合には餘程氣を大

きく持つべきであり、又餘り下を見ないが良い。然し餘りの景色の美に自然に首が其方に向く。藍緑の間に一道の白布は遠く彼方に下つてゐる。何だか此處から一氣にスキで下つて見たい様な氣がする。

かうして危険な難所を通りすぎると、有名なお花畠となるのである。

お花畠から頂上へ

今は百草の雅芽は新しく装ひをし始めた時である。僅にムシトリキンボウゲ等二三の花が咲いてゐる。人夫の話に初めて知つた、雪割桜は山姫の簪の花か、濃紫淡紅艶を戦し、幽香馥郁。其他名も知らぬ珍らしい綠葉は、そぞろ百花絢爛の時がうかゞはれる。朱唇紅花、黃面綠品、或は清楚なの、或は妖冶な車百合に黒百合に、その可憐さに誰も心を動かさないものはないだらう。げにや雲霧縹渺のところ、絢爛艶麗なる所謂お花畠の光景、其美、其麗、何者かよく比すべき、此大の樂園に逍遙する我等の心は、己に神、身はこれ仙。

此の邊より富士で言へば、胸つき八町と言ふべき所

路は葡萄の中を縫ふて、右へ左へ、益々急に、次第

るのである。

この小屋は白馬山中唯一の宿泊所であるから。五十人、百人、況んや二百、三百の登山者があつても皆この三つの小屋に收まらなければならない。その不便がある。我等いや、今日の登山者は一樣に、其數の少いことを願つたであらう。まして之が又寝具にまで影響するのであるから。寝具にも限りがある。つまり登山客が多いと毛布の配當が一人に對して割が少くなるから。話は横道にそれたが、先程から此の小屋は、後から後からと、満ちて行く。いさゝか心細い。

身は俗界を抜くこと一萬尺

稍々暖かになつたので戸外に出る。此の小屋は頂上から五六町下の低凹の處にあるのである。

嗚呼之が白馬の山頂だ。嶮岨空を劈く。其壯嚴なるさすがは日本アルプスの重鎮。西から東に大傾斜し、東南に大断崖を樹ててゐる。下界を鎖してゐた白雲、怒濤の如く先を争つて岳頂目懸けて、驀然として登り来る。其頭を拂ひて其願下へ消え去る。或ひは屢々白霧濛々の中に包まれる。

其天涯の頂に到ると、巒氣常に磅礴雲霧は徂來する

に險を加へ、岩に登り巨岩を飛越え、十步進んで一息八歩に一休み、漸くにして、山骨現はに、草短く頂上小屋近くにたどり着いたのである。
時間は已に四時に垂んぐとして居る。

山頂の小屋

残り辨當と餅、サンドイッチ、果物、菓子等で空いた腹を漸く満足さすと、寒さが俄に肌身にこなへる。汗でびつしより濕つたシャツも着けたまゝ、態々持つて來た防寒具を残らず付ける。炭火に温みを取つても氣のせいか、やはり寒い。一刻も火の側から離れどみない。

こゝに一寸この小屋の様子を説明して置かう。この小屋は四ツ谷の白馬館の經營になつて居る。小屋が三棟あり、各々十二疊敷位ひの平屋立ちである。壁は石を以つて疊み上げ、南面して一つの窓は、唯一の明取り簾外張窓である。天井は當世流行のバラツク式。家の中は真中三尺巾位いの道否庭があり、之が即ち火鉢を兼ねてゐるのである。床は低くゴザが敷かれてあるばかりである。

この小屋には夏中一二三人の人がゐて登山者を接待す

足は信濃・越後・越中の三國に跨り身は俗界を抜くこと一萬尺、今や人界と自然界との交關に立つて、縹渺紫微に入る想がある。此の高遠雄大なる宇宙の大觀に接しては、口に言ふ能はず、筆紙に盡し難い。胸中へ塵事なく、愴然として涙の滂沱たるのを覺らない。疲れもどこへか散つてしまつた。去來する雲でも持つて行てしまつたのだらう。

其の眺望の雄大なる。西南一帯は白雲怒濤がうねる雲海の美、雲海の雄、西遊記の孫悟空が雲に乘じ、文明の利器が雲間を、否海雲の上を突破する様が、明らかに、うかゝわれる。

西方、晴巒兩峯を壓して雲海に聳立するのが、之れ越中の立山、殘雪鮮かに、古來人跡を印すること少い劍ヶ嶽の森嚴、覺ゆず我等をして尊拜せしめるのである。劍ヶ嶽：劍ヶ峯、望むべくして即くべからず。

西北方は直ちに雲海に初まつて劈空に終つてゐる。洋々たる日本海は其下になつてしまつて居る。百川も之に宗朝してゐるが見ゆす。たゞ灣を隔てた、能登半島の突出がかすみ見えてゐる。

太陽も次第に西に傾いた。かゝる海上を來た、萬里

の長風は、千古不盡の雪上を撫して、直ちに面を拂ふ

爽涼秋もすぎてゐる。

西南、直ちに杓子。鎧ヶ岳から大黒嶽の頂上を伏瞰して、稍々南へ偏して、後立山・鹿島鎗ヶ嶽・祖父ヶ嶽・針木峠の連脈起伏して、何れを夫れと認め難いが一剣寒く天を刺すものは、云はずして、信飛境上の雄

鎮、槍ヶ岳であることが知れる。其威風堂々群峯を見孫視するところ、さすがは日本アルプスの英主である更に淺間の煙は東に向ひて並列してゐる。東南遙に雲煙模糊の間に、巍然として頭角を現すものは、之れ芙蓉峰である。千山萬岳、皆之に向つて長揖してゐる前路を取つて石室に歸らうとする、又忽ち岳頂目懸けて來る雲煙の爲、濛々の中に包まれてしまつた。

夕輝は遙か彼方へ没せんとし、其前面に横はつてゐる奇峯の夏雲は皆紫色の覆輪を着けてゐる。或ものは朱馬が紺轡を振つて奔逸してゐる様であり。或ものは金兜緋甲の勇士が炎焰たる内に奮闘してゐるのに似てゐる。之れ又一奇觀を呈してゐる。やがて遠山近水は夢よりも淡くなつて來た。吾等は石室の上方小高きところに登つて、しばらく此の大景を眺めたのである

半煮飯にアザミ汁

三つの小屋は満員の盛況である。一つの小屋に四十人程つまつてゐる。窮屈なこと、荷物の置場もない。

四圍が漸く混沌として來ると、寒さが次第に加はつて來る。小屋の外に出てみると、下界の冬だ。耳はちぎれそう、手先は刺す様にしびれてゐて感覺がない。漸く高山名物の、半煮飯の食事が始つた。山と盛られた、御飯は温かさうにホコ／＼と湯氣を上げてゐるのみ／＼と盛つたお汁の、大きな鍋が運ばれる。如何にもおいしそうだ。温かさうだ。大きな片鉢に盛つてもらつた御飯、温かいぞと思つて一口口に入れると其味は、何とも言へぬ味、吐き出したくなる。米にシングがある。

誰でも知らないものは、之はきっと人夫の飯焚きが下手で半煮飯を食はし居つたな、と思ふに違いない。之は學校で教つたまゝ説明して見ると斯様な譯である。高い山になると、其高い程氣壓が低いのである。之の氣壓と言ふものは、燃焼に大なる影響があるのである。則ち氣壓が低いと其の沸騰點が低くなるのである。故に高い山、氣壓の低い所で、米等を煮るごと、平地

では百度に於て始めて沸騰するが、こゝでは七八十度

で沸騰して泡をふいてしまふ。故に完全に、充分に煮えないから半煮飯が出来るのである。だから高山等で煮物をする時は出来るだけ蓋を重くするのである。大きな石等を戴せるのである。先づ半煮飯の出来るのは斯様な譯であつて、決して米も水も悪いのではない。

人夫の焚き方がますいのでもないのである。大きな石等を戴せるのである。先づ半煮飯の出来るのは斯様な譯であつて、決して米も水も悪いのではない。

いともまづいとも區別がつかぬ。皆始めての、珍しい面白い経験に頓驚聲を擧げてゐる。全く世外の趣がある。さすがは強力、五六杯平げた人がある。

樂しきまどひ

客人「明日も上天氣だらうか、人夫さん」

人夫「大丈夫でさあ」

客人「明日杓子から、鎧の方へお越しになる方はありますませんか、ありましたら御一緒にどうか」

客A「行きますよ」

客B「御一緒にどうか」

客C「我々も行きますから」

忽ちの中に、十餘人同志は出來る。我等一行も丁度初の豫定に付き、好き仲間を得たのを喜び最速同意する。

我々の向ひ側、炭火が氣持ちよく赤くなつてゐるその向ひに、一團の紳士が、先程から登山の話に花を咲かせてゐるらしい。其話では其人々は大分山に経験あるらしい。白馬へ四度目の登山だとか、阿蘇へ行つたとか、其の経験談もにぎやかさう。やがて話がご絶れたらしく。此度は我々の方へ向つて話が廻つた。

一杯の御飯に腹は充分満足する。實際この食事は甘

紳「君等彦根中學校だね」

「そうです」

紳「我々は君等が彦根で乗車するのを見てゐたよ。それからはずつと、同じ汽車らしかつたね」

一向こちらには覺ぬがない。たゞ雪渓の上で追越しのを薄く覺えてゐる。

「失禮ですが貴方方はどちらから御越しなのですか。」

紳「我々か、我々は岡山だがね。」

どうやらお醫者さんの團体らしい。

紳「君等の學校は登山は大分盛んらしいね。」

たしか、宿泊名簿には、彦根中學校山岳部第三班と書いてあつた筈だ。

「かなり、ね。」

紳「第一、第二班はどこへ行つてゐるの。」

さあこれにはこまつた。どこがよからう。

「一班は大和アルプス横斷をやつて居ります。第二班は白山へ行つて居るんです。」

どう／＼出駆良日を言つてしまつた。もうそれ以上聞ふな、と専ら心配。

紳「彦中はスキーは盛んだらうまあ、よかつた。スキーならいくらでも話してやらう。」

紳「伊吹山と言ふ良いスキー場があるから君等も行くかね。」

「スキ／＼は我々の冬の遊び、否運動ですよ。」

あちらの隅では、一生懸命に、日記を付けてゐる人がある。北の隅に二高の學生らしい二人連。

A「こんな山位ひにアルペニストックなんかいらぬいね」

B「左様さ、大層すぎるね。」

何言つてゐるんだい。先生途中でヘタバツテ居たくせに。

A「爺や、煙草は賣つてるかね」「エーアシップだよ。無いとね。敷島だけあるんだね。敷島なんか睡めやしないよ」

先程から餘り氣持ち良く思はれてゐないと見えて、話相手もないらしい。こう／＼つまらないと見ゆて、ハーモニカを御演奏遊ばす。餘り歌が六四敷いので、

我々には一向解り申さぬ。

ルツクサツク枕に寝そべつた人が、

「人夫さん、明日は上天氣がね。」

人夫「そりア、大丈夫でせう。」

「明日の路はけわしいかね。一つ明日の行程の話でもして呉れ給ひ」

人夫「今日、明るい内に御覽になつたでせう。ついそこの杓子・鏟は近い様でも、登つたり、降つたりして行かなきやならないんです。そして鏟から少しく下つた所に鏟の温泉があるので。そこまでがこゝから約二里はあるでせう。」

人夫「その温泉には這入れるね。」

人夫「浴れますとも。雲の去來するのを望んで、海拔七千尺の高所で、岩壁から湧出する温泉に浴することは、王候の贅と雖ども此に及ばないでせうよ。」

人夫さん、なか／＼偉いことを謂ふ。

「其日の中に四ツ谷まで歸れるかね」

人夫「大急ぎなら歸れるでせう。然し路もけわしく六里程ありますから、少々おそくなるでせう。」

愈々我々も明日は鏟の温泉に入浴し、王候の贅以上

のものを盡して、其晩四ツ谷に無事下山することが出来るのだ。

話に身が入り高山に居る氣分も薄らぐ。炭火は赤い焰を擧げてはゐるが、寒さは身に刺す様にこたへる。

先程から、パンを焼いてゐる二人の客。言葉から東京の人らしい。

「僕等は昨日こゝへ來ましたがね。昨日も今日の様に非常にいい天氣でした。今朝から大池へ行つて來ました。今日中に温泉まで行つて、そこで今夜は宿る豫定をしてゐました。ところが、大池が思つたより遠く又、餘り良い景色だつたもんだから、どう／＼一日費しましてね。又一晩こゝで宿る様になつたのですよ。」

「大池はそんなに遠いんですか。景色もそんなにいゝんですね。」

「景色はよかつたですね。」「この頂上を向へ降りて、小蓮華を越へて行くのです。小一里、も少しありませうかね、海拔一萬尺の高い所に湖があつて、漫々と水をたゝへてゐます。水の奇麗なこと、すき通る様に澄んでゐて、静かなこと、魚でも飛び出しさうだ

ね、其の湖の岸には、白馬のお花畠にも劣らぬ、花園があつて、新生の此頃さへ實に奇麗だ。まして其開花の時分が一度見たいね。物凄い程、澄んでゐる水面を雪が魔物の様にかすめて行く。其岸の巨きな岩に坐つてゐるごと、地獄と極樂の境に立つてゐる様な氣がするね。冬になると北氷洋のやうに氷の大塊が浮くそうだ斯様な高い所に大きな湖があるのが不思議だね。」

戸外から、「素敵だ」の聲が人々の觀喜をそゝる。

人々は我勝ちに戸へ躍り出す。

暗々たる夜が人間を包んでゐる。立山の頂に、淺間のほどりに、槍の空に、一つ二つ三つ四つの閃星、遂に満天無數の星辰。

次第に朦朧は晴れて、蟻垤の如く見えた山は夢よりも淡い。

星の達する限り、視力の及ぶ極みに、遙に遠く、西方の下界に幽かに光火が見ゆる。火は一團の火にあらず。光は一團の光でない。細く、長き、縦横の光數條細きことは繩の如く、時には、斷雲に遮ざられてか或は明、或ひは滅。此の眼前の光景に、吾等は沈静安慰の念を生じ、幽邃深遠の感がする。實に衆慾の繫

縛を脱して、無念無想の境に逍遙想を爲すのである。この火光は一萬尺の高處から見た富山市街の電燈である。

溟中渾沌の所に、微に紅白く依稀として五彩をなしには光芒陸離として天に放射する様は、實にザブライムなり、ビュティフルである。次に煌々たる月輪が躍如として昇る。天地は之より清明、下界を蔽へる雲霧の海は悉く銀色となり、プラチナの覆輪を着ける。絶大觀はあらむやである。

鏡の邊りは銀雲の怒濤ひた打ち、紫翠千堆、漂渺逶迤たる立山連峯も神のごとくに壁空に坐してゐる。

結ぶバラダイス

漸く毛布の配分がきまつて、三人は二枚の割合に配られる。薄べらな赤毛布が一人に一枚もあたらないのである。どうせ寝つかれないのはきまつてゐる。ルツクサツク枕に、背合せか、抱き合つて寝る。手一つ動かせない。まして寝かへりも出來ないきうくつさ。お互の迷惑を慮かつて辛棒する。しゃくにさはるのはハーモニカ。

いつか、まどろになると、サトベルの音がする。お巡りさんだ。人夫を督勵して、炭火を焚かしたり、毛布の少なさうなところへ残りの毛布を掛けさせてゐるらしい。お巡りさんも御役目御苦勞なことだ。

素敵な鼻息がする。寝られないでの嘆息してゐる人がいる。華胥に遊んでゐる人はどんな夢をむすんでゐるだらう。家内一同を集めて、登山の愉快を吹張してゐる夢を見てゐる人もあらう。明日の行程を夢みてゐる人もあるだらう。九郎兵衛谷へ墜ちてゐる夢をみてゐる人もあるだらう。九郎兵衛谷とは鎌の右下にある有名な黒部川の魔境である。中には甘い夢をみてゐる人もあるだらう。

夜はいつの間にか明けてゐる

バタ／＼。扇子をつかふ音に目覺めた。午前二時。誰か寝つかれぬため火をおこしてゐるらしい。目が覺めたら、益々目はさむてくる。寒さが骨身に刺すやうにこたへる。

一人起き、二人起き、三人四人。一人寄り、二人寄り、三人四人、火のもとに集まる。顔でも洗ふかと思つて、洗面所を尋ねると、人夫さ

ん、顔を洗つちやいけないと言ふ。何故かと聞くと、顔や手が荒れると言ふ。

今まで氣付かなかつたが、天井から一つの角ランプがつるしてある。その張紙に振つたことが書いてある「小便お断り」これにはおどろいた。これでも一等旅館だからおどろく。客を馬鹿にしてゐる。と御噴激大方ならぬい人がある。多分寒さのために思はず尾籠する人があつたのだらう。苦笑にまぎらす面白さ。外は何度見ても夜は明けぬ。雑談に花が咲く。

六時になつた。外は大分明るくなつたやうであるが

何も見はない。

戸外に出てみると驚いた。夜はすでに明けたにちがひないが、ひどい濃霧に風がはげしい。一寸さきは見えない。その上に風は直立をゆるさない。寒威凜烈齒の根も合はない。烈風が異やうにうなる。日輪は出てゐるはずだが影さへみれない。目前に見えてゐた鎌に杓子、さては立山、槍に穗高・富士・淺間は昨夜の中に消ゆさせた。濛々たる雲霧はこの身を別世界へ、たつた一人降した感がする。心細いやうな氣がするかと思ふと、又神のやうな氣にもなる。そうすると我身